



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中学生における「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係 : 教室における個人の地位と集団の地位という視点から
Author(s)	水野, 君平; 加藤, 弘通; 川田, 学
Citation	子ども発達臨床研究, 7, 13-22
Issue Date	2015-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.7.13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58515
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_7_13-22.pdf



原著論文

中学生における「スクールカースト」と コミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係

— 教室内的における個人の地位と集団の地位という視点から —

水 野 君 平¹⁾・加 藤 弘 通²⁾・川 田 学³⁾

The relationships between “School Caste”, communication skills and School adjustment on junior high school students

— Analysis of intergroup status and intragroup status in the classroom —

Kumpei MIZUNO, Hiromichi KATOU, Manabu KAWATA

要 旨

本研究の目的は中学生のコミュニケーション・スキルと学級内の地位、及び学校適応の関連を明らかにすることである。そのために、公立中学校の生徒 780 名に対してコミュニケーション・スキル、学校適応感、学級内の地位を尋ねる質問紙調査を行った。その結果、コミュニケーション・スキルは学級内での人気を媒介して生徒の学校適応感に影響を与えることが明らかになった。また、重回帰分析の結果から、男子において、表現を理解するスキルを持ち、良好な人間関係を志向し、他者受容的ではない生徒ほどクラスの中で中心的なグループに属することが示された。

キーワード：コミュニケーション・スキル、学校適応感、スクールカースト、思春期

問題と目的

青年は親からの心理的離乳の途上にあり、親や教師といった大人との関係よりも同年代の友人との関係の方を重視するようになる。特に現代の中・高校生にとって友人関係というのは、たいへん重要な関心事である。NHK (2013) の「中学生・高校生の生活と意識調査・2012」では、「あなたが悩みごとや心配ごとを相談するとしたら、主に誰に相談しますか。」という質問に対して、「友だち」

と回答した中学生の割合は 41.8% であり、回答率が最も高かった。しかしその一方で、現在の学校生活では、友だちを初めとする他者と関わるための「対人能力」⁴⁾が、生徒の間でより大きなエネルギー

4) なお、本研究において、「コミュニケーション能力」や本田 (2005) の「対人能力」、藤本 (2006) の「コミュニケーション力」について、藤本・大坊 (2007) の「コミュニケーション・スキル」と同様に、「言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切におこなう能力」として定義する。その上で、それらを「コミュニケーション・スキル」と同様に扱う。

1) 北海道大学大学院教育学院 修士課程

2) 北海道大学大学院教育学研究院 准教授

3) 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 准教授

ギーと関心を割くべきテーマとして浮上している(本田, 2005)。同様に、現代社会においては、他者を理解し、他者から理解され円滑な人間関係を形成するためにも「コミュニケーション力」の要性が指摘されている(藤本, 2006)。

そして、さらに重要なのはこのコミュニケーション・スキルによって学校生活のありかたが変わってくるということである。例えば、鈴木(2012)では、コミュニケーション・スキルの高い生徒はドクラスでの「権力」を手にし、反対に、コミュニケーション・スキルが低く、「下位だと見なされるグループに所属すると、みんなの前で『騒ぐ』とか『楽しくする』といった権利が与えられ」ず(鈴木, 2012, p.134)、コミュニケーション・スキルの高い生徒に追従するようになることが指摘されている。そして、鈴木(2012)は、このようなコミュニケーション・スキルの違いによって生じる友人グループ間のランクのことを「スクールカースト」と呼んでいる。

さらに、鈴木(2012)は、スクールカーストとコミュニケーション・スキルおよび学校適応との関係について、質問紙調査と大学生へのインタビュー調査から次のことを明らかにしている。まず、「スクールカースト」の序列が上位の生徒はコミュニケーション・スキルが高く学校への適応も高い一方で、序列が下位の生徒はコミュニケーション・スキルが低く学校への適応も低い。さらに、上位の生徒は学校生活に対してポジティブな印象を、下位の生徒はネガティブな印象を抱いているということである。

本研究ではこの「スクールカースト」に注目しつつ、コミュニケーション・スキルと学校適応の関係について検討していくが、「スクールカースト」については鈴木(2012)だけでなく、それ以前にもいくつかの研究が存在しており、その定義も異なる。そこでまず、「スクールカースト」の定義についての整理を行い、本研究の定義を示す。

「スクールカースト」について、森口(2007)は「スクールカーストとは、クラス内のステイタスを表す言葉…(中略)…ステイタスの決定要因が、

人気やモテるか否かということ…(中略)…上位から『一軍・二軍・三軍』『A・B・C』などと呼ばれます。」(森口, 2007, pp.41-3)と定義した上で、「スクールカーストを決定する最大の要因は『コミュニケーション能力』」(森口, 2007, p.43)であるとしている。そして、「ここでのコミュニケーション能力とは、『自己主張力』『共感力』『同調力』の3次元マトリクスで決定され」(森口, 2007, p.44)、「三つの総合力(コミュニケーション能力)を主因としてスクールカーストが決定され」(森口, 2007, p.45)るという。「自己主張力」とはリーダーシップをとる力を指し、「共感力」とは他者と相互に共感する力を指し、「同調力」とはクラスのノリに同調し、時にはノリをつくる力を指す(森口, 2007)。そして、「スクールカースト」ははじめを読み解くための新たな思考枠組みとして認識すべきだと述べている。

次に鈴木(2012)では森口(2007)の整理を参照し、「スクールカースト」を表すための代理指標として「クラスの人気者だ」という自己報告に基づいた指標を用い、得られた回答から対象者を3分割した。そのうち「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」を上位、「あまりあてはまらない」を中位、「まったく当てはまらない」を下位とすることでスクールカーストの序列を設定した。さらに鈴木(2012)は、大学生と中学教師へのインタビューを行うことでより詳しく分析をおこなった。その結果、学力とカーストの序列の関連性は低く、「スクールカースト」において上位であることは生徒からは「権力」として、教師からは「能力」として把握され維持されるということを明らかにした(鈴木, 2012)。

しかし、鈴木(2012)の問題点として、①集団間の序列である「スクールカースト」を個人の評価である「人気度」だけで分析しているため、集団間の関係性が考慮されていないこと。②コミュニケーション・スキルは「スクールカースト」を媒介して生徒の学校適応に影響を与えることはインタビュー調査から述べられているが、量的なデータからは検証されておらず、一般化するには

不十分であること。③コミュニケーション・スキルに対する質問項目数が少ないため、具体的にコミュニケーション・スキルのどのような側面が「スクールカースト」に影響を与えているのかということ把握しきれていないことが挙げられる。

そこで本研究では、これらの問題点に対して、①個人間・集団間の評価に対する指標を用いて、コミュニケーション・スキルと「スクールカースト」と学校適応の媒介関係を明らかにする。その上で②コミュニケーション・スキルに関する質問項目を増やすことでコミュニケーション・スキルのどの側面が「スクールカースト」に影響するのかを検討する。

以上をふまえ、本研究では「スクールカースト」を「学級内における生徒間の人気に基づく序列」または「学級内における生徒の所属する友人グループの地位に基づく序列」と定義し、「スクールカースト」がコミュニケーション・スキルとどのように関係しながら、生徒の学校適応に影響を与えているのかを検討する。

方 法

1. 調査協力者

公立中学生2校1年～3年の780人（男子395人、女子380人、無回答5人、1年生245人、2

年生258人、3年生277人）を対象に質問紙調査をおこなった。

2. 調査内容

学年、クラス、性別を記入するフェイスシートに加え、以下の項目を尋ねた（表1）。

(1)人気度：鈴木（2012）と同様に、生徒自身が所属するクラスの中でどれだけ人気であるかを「私はクラスで人気者だ」という質問で、「とてもそう思う（4点）」から「全くそう思わない（1点）」の4件法で尋ねた。

(2)中心度：生徒がクラス内で所属している友人グループがクラスでどれだけ中心的なグループであるかを「私のいるグループはクラスで中心的なグループだ」という質問で、「とてもそう思う（4点）」から「全くそう思わない（1点）」の4件法で尋ねた。

(3)学校適応：渡辺・内野（2009）を参考に、橘川・高野（2005）の学校適応感尺度から「学習適応感」、「教師関係適応感」、「友人関係適応感」、「部活動適応感」の因子負荷量が高い1項目ずつ、計4項目を用いた。「よくあてはまる（6点）」から「全く当てはまらない（1点）」の6件法で尋ねた。

(4)コミュニケーション・スキル：藤本・大坊（2007）のENDCOREの点数を7件法から5件法に変

表1. 本研究で用いた質問項目

	項目	質問文
スクールカースト	人気度	私はクラスの中で人気者だ
	中心度	私のいる友だちグループはクラスの中心だ
コミュニケーション・スキル	自己統制	自分の感情や行動をうまくコントロールする
	表現力	自分の考えや気持ちをうまく表現する
	解読力	相手の伝えたい考えや気持ちを読み取る
	自己主張	自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する
	他者受容	相手を尊重して相手の意見や気持ちを理解する
学校適応感	関係調整	周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態を維持する
	学習適応感	授業はおもしろい
	教師関係適応感	何でも相談できる先生がいる
	部活動適応感	部活動に一生懸命とりくんでいる
	友人関係適応感	何でも相談にのってくれる友だちがいる

更して用いた。「得意（5点）」から「苦手（1点）」の5件法で尋ねた。

3. 手続き

それぞれの中学校の学級活動の時間に一斉におこなった。回答の指示などはそれぞれの学校の教師に任せ、回答済みの質問紙はその場で生徒が封筒に入れ、封をしてもらった上で回収した。

4. 調査期間

2013年10月におこなった。

なお、本研究で使用した統計パッケージソフトはHAD 12.128⁵⁾を使用した。HADとは、清水・村山・大坊（2006）において作成されたフリーの統計パッケージソフトである。

結 果

1. コミュニケーション・スキルとスクールカーストが学校適応感に与える影響と構造

まずコミュニケーション・スキルが、スクールカーストの関連要因である個人の人気度とその個人が所属している友人グループの地位の高さ（以下、中心度）にどのように関係して、生徒の学校適応感に影響を与えているのかを検討するために、図1に示したようなモデルを考え、共分散構造分析をおこなった。

なお、鈴木（2012）では「コミュニケーション能力があるから「スクールカースト」の上位に位置づくわけではなく、相対的に「スクールカースト」の上位に位置づく生徒だけが、意見を押し通すことを許容されているだけであるようにも見えます」（鈴木，2012，p.132）と、コミュニケーション・スキルと「スクールカースト」の因果関係が

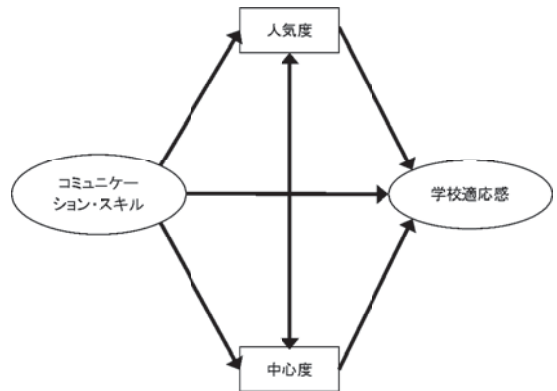


図1. 共分散構造分析のモデル図

必ずしも図1の限りではないとしている。しかし、本研究では「スクールカースト」が形成される過程を問題として扱っており、「スクールカースト」が形成される際にコミュニケーション・スキルがどのような影響を与えるかを検討するために、コミュニケーション・スキルが「スクールカースト」に影響するモデルを考えた。

具体的には、コミュニケーション・スキルについて ENDCORE の6項目を観測変数として使用し、潜在変数として「コミュニケーション・スキル」を新たに作成した。学校適応感については橘川・高野（2005）の学校適応感尺度から渡辺・内野（2009）を参考に「学習適応」「教師関係適応」「友人関係適応」「部活動適応感」から因子負荷量の高い1項目ずつを選定した。それらを観測変数として使用した上で、潜在変数として「学校適応感」を新たに作成した。なお、分析対象者は380人であった。共分散構造分析を行った結果、モデルの適合度は、 $X^2=115.25$, $df=50$, $p<.00$, CFI=.95, RMSEA=.06, SRMR=.40であり、許容範囲内であった（図2）。

「コミュニケーション・スキル」からのパス係数をみると、「人気度」と「中心度」と「学校適応感」に有意なパスが引かれた。「人気度」からは「学校適応感」に有意なパスが引かれ、「中心度」との間には有意な相関関係がみられた。しかし、「中心度」から「学校適応感」には有意なパスは引かれなかった。これらの結果から、「コミュニケーション・ス

5) Microsoft EXCEL の VBA を利用することで運用できる。作成者によって回帰分析の出力に関しては SPSS と同様の結果を得られることが明らかになっている。構造方程式モデルに関しては、Mplus と推定値は一致するが、SRMR は Mplus の定義とは違うものを使っているので一致しないことが明らかになっている。

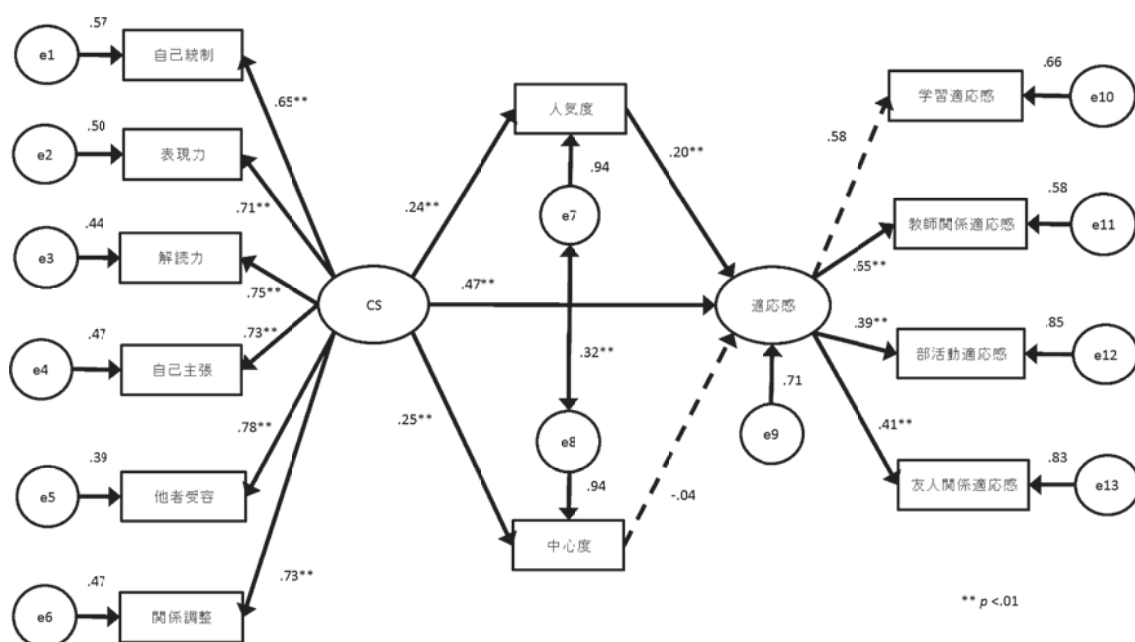


図2. 共分散構造分析のパス図

注：CS＝コミュニケーション・スキル、適応感＝学校適応感。破線は有意ではないパスを示す。

キル」と「学校適応感」の関係は直接的な効果に加え、「人気度」を一部媒介して説明され、「中心度」による媒介によっては説明されないことが示された。

以上の結果から、「コミュニケーション・スキル」は、所属する集団の「中心度」ではなく、個人の「人気度」を媒介して「学校適応感」に影響を与えることがわかった。また、「コミュニケーション・スキル」は「人気度」と「中心度」に影響を与えることも示されたが、「コミュニケーション・スキル」という潜在変数を想定して分析したため「コミュニケーション・スキル」のどの側面が「人気度」や「中心度」に影響するのかはわからない。また、共分散構造分析で使用したモデルは性別や学年の影響は統制されていない。したがって、以下ではコミュニケーション・スキルのどの側面が「スクールカースト」に影響しているのかより詳細に検討を加え、併せて、性差と学年差についても検討していく。

2. スクールカーストに影響を与えるコミュニケーション・スキルの検討

ENDCOREの各項目と性別、学年を独立変数とし、人気度と中心度を従属変数とした階層的重回帰分析をおこなった。その際に、性別に関しては男子＝0、女子＝1の変数を作成してダミーコード化した。学年は2年ダミーとして、1年、3年＝0、2年＝1の変数と3年ダミーとして、1年、2年＝0、3年＝1の変数を作成してダミーコード化した。

Step1に性別と学年を投入し、Step2にENDCOREの6項目を投入し、Step3に性別とENDCOREの交互作用項を投入し、Step4に2年ダミーとENDCOREの交互作用項を、Step5に3学ダミーとENDCOREの交互作用項を投入した。なお、本研究では階層的重回帰分析を実施する際に、*M* 推定⁶⁾によって外れ値の影響を小さく

6) 外れ値を除外せずに外れ値の重み付けを変えることで、外れ値の影響を小さくし、より頑健な推定値を計算するものである。なお、HADではHuberの関数が用いられている。

表 2. コミュニケーション・スキルが個人間地位に与える影響

変数名	Step1	Step2	Step3	Step4	Step5
切片	1.680**	1.702**	1.702**	1.704**	1.704**
性別	-0.228**	-0.199**	-0.207**	-0.209**	-0.209**
2年ダミー	-0.125	-0.097	-0.101	-0.094	-0.097
3年ダミー	-0.210**	-0.179**	-0.172**	-0.171**	-0.175**
自己統制		0.043	0.043	0.055	0.054
表現力		0.070*	0.068*	0.061	0.057
解読力		0.029	0.030	0.015	0.014
自己主張		0.095**	0.094**	0.109**	0.106*
他者受容		-0.019	-0.021	-0.043	-0.051
関係調整		0.110**	0.109**	0.127**	0.134**
自己統制*性別			0.039	0.032	0.034
表現力*性別			0.069	0.062	0.068
解読力*性別			-0.088	-0.097	-0.103
自己主張*性別			-0.086	-0.087	-0.087
他者受容*性別			0.036	0.041	0.048
関係調整*性別			-0.018	-0.011	-0.015
自己統制*2年				0.078	0.078
表現力*2年				-0.066	-0.079
解読力*2年				-0.065	-0.067
自己主張*2年				0.090	0.090
他者受容*2年				-0.132	-0.156
関係調整*2年				0.083	0.100
自己統制*3年					-0.003
表現力*3年					-0.022
解読力*3年					-0.004
自己主張*3年					-0.005
他者受容*3年					-0.041
関係調整*3年					0.033
R^2	.042**	.160**	.164**	.169**	.171**
ΔR^2	.042***	.118***	.004	.006	.001

N=720

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

した上で回帰係数を推定した。

2-1. コミュニケーション・スキルが人気度に与える影響

階層的重回帰分析の結果から、Step2においてモデルが有意 ($R^2 = .16$, $p < .001$, $\Delta R^2 = .12$, $p < .001$) であった (表2)。主効果では、性別、3年ダミー、表現力、自己主張、関係調整が有意であった。つまり、男子であること、3年生でないことが人気度を高め、コミュニケーション・スキルでは表現力や自己主張や関係調整が高いほど人気度が高いことがわかった。

2-2. コミュニケーション・スキルが中心度に与える影響

階層的重回帰分析の結果から、Step3においてモデルが有意 ($R^2 = .13$, $p < .01$, $\Delta R^2 = .03$, $p < .01$) であった (表3)。主効果では自己統制が有意であった。つまり、自己統制が高いほど所属集団の中心度が高いことが示された。また、交互作用項では解読力と性別、他者受容と性別、関係調整と性別のパターンが有意であった。そこで、下位検定を行なうために Cohen & Cohen (1983) に従い、単純傾斜検定をおこなった。通常は平均 +1 SD と -1 SD の場合に分けて回帰係数を算出するが、本研究では性別のダミーコードで2分類し回帰係数を算出した。なお、エラーバーは標準

表 3. コミュニケーション・スキルが集団間地位に与える影響

変数名	Step1	Step2	Step3	Step4	Step5
切片	2.267**	2.265**	2.271**	2.271**	2.274**
性別	-0.143	-0.090	-0.088	-0.086	-0.106
2年ダミー	0.150	0.173	0.174	0.166	0.154
3年ダミー	0.048	0.100	0.122	0.114	0.117
CS1		0.114*	0.126*	0.156**	0.185**
CS2		-0.005	-0.003	-0.016	-0.043
CS3		0.077	0.062	0.047	0.087
CS4		0.134*	0.100	0.126*	0.112
CS5		-0.084	-0.073	-0.087	-0.137
CS6		0.083	0.102	0.098	0.099
自己統制*性別			0.050	0.058	0.059
表現力*性別			0.044	0.036	0.057
読解力*性別			-0.262*	-0.281*	-0.320**
自己主張*性別			0.148	0.161	0.172
他者受容*性別			0.299*	0.280*	0.322*
関係調整*性別			-0.294**	-0.287**	-0.304**
自己統制*2年				0.141	0.210
表現力*2年				-0.123	-0.171
読解力*2年				-0.067	0.000
自己主張*2年				0.148	0.134
他者受容*2年				-0.113	-0.203
関係調整*2年				0.007	-0.017
自己統制*3年					0.122
表現力*3年					-0.102
読解力*3年					0.159
自己主張*3年					-0.032
他者受容*3年					-0.214
関係調整*3年					-0.017
R^2	.012	.098**	.129**	.137**	.148**
ΔR^2	.012***	.086***	.030**	.008	.011

N = 494

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

誤差である。

その結果、男子において、読解力が高いほど所属集団の中心度が高く(図3、 $B = .25$, $p < .05$)、関係調整が高いほど所属集団の中心度が高いが(図4、 $B = .25$, $p < .01$)、他者受容が低いほど所属集団の中心度が高いことが示された(図5、 $B = -.30$, $p < .01$)。

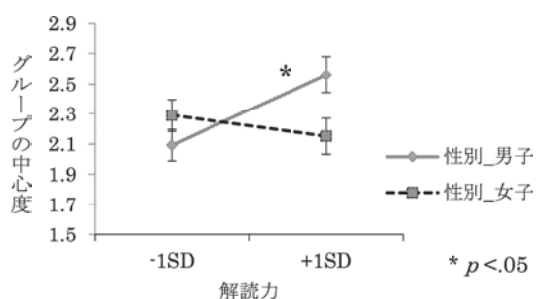


図 3. 性別と読解力の交互作用

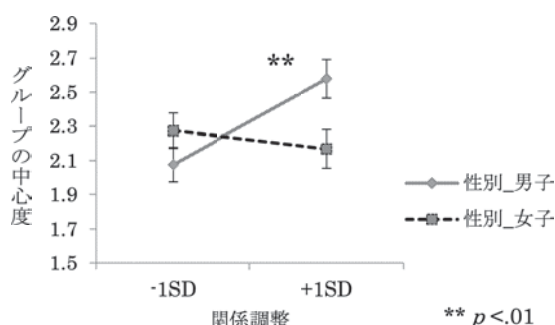


図4. 性別と関係調整の交互作用

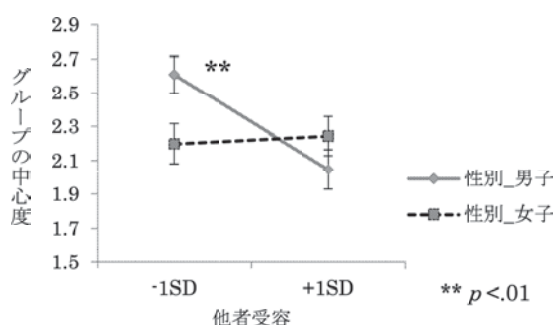


図5. 性別と他者需要の交互作用

考 察

本研究の目的は、(1)個人間・集団間の評価に対する指標を用いて、コミュニケーション・スキルと「スクールカースト」と学校適応感の媒介関係を明らかにし、(2)コミュニケーション・スキルに関する質問項目を増やすことでコミュニケーション・スキルのどの側面が「スクールカースト」に影響するのかを検討することであった。

以下、以上の点を踏まえ、コミュニケーション・スキルと「スクールカースト」の関係について考察を加えていく。

1. コミュニケーション・スキルと「スクールカースト」と学校適応感の媒介関係

共分散構造分析の結果、コミュニケーション・スキルと「スクールカースト」と学校適応感には以下の関係が見いだせた。まず、「コミュニケーション・スキル」は「人気度」と「中心度」と「学校適応感」に影響をあたえることがわかった。そ

して、「コミュニケーション・スキル」と「学校適応感」の関係は「人気度」を一部媒介して説明されるが、「中心度」を媒介としては説明されないことが示された。また、「コミュニケーション・スキル」から「学校適応感」に向けられたパスは、「人気度」を媒介とするパス係数の値よりも大きかった。しかし、「人気度」を媒介として「コミュニケーション・スキル」が「学校適応感」に影響を与える経路も明らかになった。「人気度」は個人的な人気を反映し、「中心度」は集団の地位を反映するものである。つまり、コミュニケーション・スキルは生徒個人の人気と所属する友人グループの地位に影響を与え、さらに、生徒個人の人気は学校適応感に影響を与えるが、所属する友人グループの地位は生徒の学校適応感に影響を与えないことがわかった。学校適応感には、所属するグループの地位ではなく生徒個人の人気が重要であることが示された。この結果から、学校適応感には、クラス内で人気があることと自己が所属するグループの地位は等しい効果を持たないと考えられる。つまり、ある生徒が地位の高いグループに属しようとも、その生徒のグループの中での地位やその生徒の個人的な人気が高くなければ学校への適応は低いと考えられる。

この結果は、「人気度」を「スクールカースト」とみなし、「スクールカースト」が学校適応感の要因であるとした鈴木(2012)の結果を支持すると言える。しかし、「所属する友人グループの地位」を表す「中心度」は学校適応感に影響を与えなかったことから、鈴木(2012)の結果は「スクールカースト」ではなく個人の人气が学校適応感に影響を与えたと考えるのが妥当だと思われる。また、鈴木(2012)では「スクールカースト」が生徒のコミュニケーション・スキルに影響を与えると示していたが、本研究の結果では逆の結果が示された。つまり、コミュニケーション・スキルが「スクールカースト」に影響する可能性も考えられるということである。

2. 「スクールカースト」とコミュニケーション・スキルの影響関係

階層的重回帰分析の結果、コミュニケーション・スキルと「スクールカースト」の間には以下のような関係がみられた。まず、表現力、自己主張、関係調整のスキルがある生徒ほど「人気度」が高かった。つまり、ENDCORE モデルのカテゴリ(藤本・大坊, 2007)に従うなら協調的かつ主張的な生徒ほどクラスで自分は人気があると思っていることがわかった。この結果は鈴木(2012)の「意見を押し通せる生徒ほど人気である」という結果を支持するものである。

次に、学年と性別に共通して自己統制のスキルの高い生徒、また、男子において読解力と関係調整のスキルが高く、他者受容のスキルの低い生徒ほど所属する集団の「中心度」が高かった。ENDCORE のカテゴリに従うと自制的であり、さらに男子においては協調的なスキルと基礎的な読解スキルは高いが他者共感的なスキルが低い生徒ほどクラスで中心的な友人グループに属していることがわかった。つまり、学年と性別に共通して自制的である生徒や、男子においては関係志向的でありコミュニケーションでの記号理解度は高いが、異なる立場の人間に対しては共感的な態度を示さない生徒ほど地位の高いグループに属していることである。他者受容的ではないということは、異なる立場の人間に対して攻撃的、あるいは支配的になることが予想される。鈴木(2012)のインタビューでは「スクールカースト」の上位の生徒は下位の生徒に対して「理不尽」な振る舞いをしていた、という光景が語られているが、このような背景には、上位の生徒の他者受容のスキルの低さが関連していると考えられる。つまり、他者受容性が欠けることで、グループ間の平等的な関係性を望むのではなく、支配的な関係を望む生徒が高い地位のグループに属すると考えられる。

また、性差を検討したところ、女子において有意な効果が見られなかった。その理由としては、女子はコミュニケーション・スキルで所属グループの地位が決定するというよりも、宮崎(1993)

で報告されたように、本研究では取り上げることのできなかった容姿やそのグループの志向するサブカルチャーのカテゴリといった要因がより重要な決定因になっている可能性が考えられる。

以上の結果をまとめると、個人の「人気度」と個人が所属する集団の「中心度」を規定するコミュニケーション・スキルには違いがみられたということである。「人気度」の向上には主張的なスキルが効果を持っており、「中心度」の向上には関係志向的なスキルが効果を持っていた。つまり、この結果は、生徒個人が人気を得ることと地位の高いグループに属することでは、異なるコミュニケーション・スキルを要することを意味しており、地位の高いグループに属する生徒が必ずしもクラスで人気のある生徒とは限らないことを示していると考えられる。

3. 本研究の課題

最後に、本研究の課題については、次のことが考えられる。まず、「スクールカースト」を測定するための効果的な方法の確立である。本研究は「クラスで人気がある」と「所属する友人グループの地位」を尋ねる項目によって分析をおこなった。しかし、「スクールカースト」とは学級内における生徒の集団間の地位関係である。その場合、複数の友人グループに属する可能性もあり得るだろうし、友人グループに属していない可能性もあり得る。明確な所属する友人グループが存在しない生徒は必ずしも地位の低い立場にいるとは限らない。この問題をどう扱うのが今後の課題となる。

次に、本研究の結果から「人気である」と「所属する友人グループの地位が高い」ことに影響を与えるコミュニケーション・スキルも異なり、学校適応感への影響も違っていた。そのため、これらは異なる属性だということが示された。そのことから、例えば、「所属する友人グループの地位が高くとも人気ではない生徒」や反対に「所属する友人グループの地位は低い人気である生徒」の存在を考慮しなければならない。つまり、集団間の地位と集団内の地位も考慮しなければならな

いということである。この点に関しては、鈴木(2012)においても「同じカースト内の地位」、つまり集団内の地位を考慮しなければならないと研究の課題として挙げられている。本研究も同じく、この点をいかに乗り越えるかが次の研究への課題となる。

文 献

- Cohen, J., & Cohen, P. (1983). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Erlbaum Associates.
- 藤本学. (2006). コミュニケーション・スキルの重要性. *日本労働研究雑誌*, **546**, 13-22.
- 藤本学・大坊郁夫. (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. *パーソナリティ研究*, **15**(3), 347-361.
- 本田由紀. (2005). 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで. 東京: NTT 出版.
- 橘川真彦・高野玲子. (2005). 中学生における学校適応感の構造と測定. *宇都宮大学教育学部紀*, **57**, 17-25.
- 森口朗. (2007). *いじめの構造*. 東京: 新潮新書.
- 宮崎あゆみ. (1993). ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子高におけるエスノグラフィーをもとに— *教育社会学研究*, **52**, 170-177.
- NHK 放送文化研究所(編). (2013) *NHK 中学生・高校生の生活と意識調査2012—失われた20年が生んだ“幸せ”な十代*. 東京: NHK 出版.
- 清水裕士・村山綾・大坊郁夫. (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用. *電子情報通信学会技術研究報告*, **106** (146), 1-6.
- 鈴木翔. (2012). *教室内カースト*. 東京: 光文社.
- 東京大学教育学部比較教育社会学コース・ベネッセ教育研究開発センター. (2009). *神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書*
- 渡辺史章・内野康人之. (2009). 中学生のコミュニケーションスキルと学校適応感の関連. *宇都宮大学教育学部紀要*, **32**, 109